# ネットワーク通信

№22
2018.1.4

## 山梨県障害者差別解消支援ネットワーク会議

事務局：山梨県障害福祉課
〒400-8501
山梨県甲府市丸の内1-6-1
Tel　055-223-1460
Fax　055-223-1464
E-mail　shogai-fks@pref.yamanashi.lg.jp

**【トピック】**
- 障害者の主張大会を開催しました。
- 「障害者週間」普及・啓発キャンペーンが甲府駅周辺で行われました。

障害者週間に開催された障害者の主張大会、今年度で28回目となります。この大会は、山梨県が主催、県障害者福祉協会が主管して、障害者が日常生活の中で考えていることを広く県民に伝えることにより、障害及び障害者に対する正しい理解を深め、障害の有無に関わらずすべての人たちがこれからの障害者福祉の在り方について共に考えることを目的として開催しています。

## 障害者の主張大会

- 12月7日(木)に県防災新館オープンスクエアを会場にして開催しました。

今年度の大会では９人の方が参加し、これまでの自分とこれからの未来に対する強い思いを語りました。壇上で語るひとり一人の堂々とした姿に、強い気持ちとこれからの生活に向かう意欲と勇気を感じました。

山梨県障害者福祉協会の竹内正直理事長は今回の大会開催にあたり、過去の大会を振り返り、これまでの参加者の主張は「微塵も己の障害を不幸と見たり、人生の先行きを悲観したりの、いわゆる『負』の姿勢はなく、辛酸と苦労の日常から生まれた家族の愛情や友情・連帯の喜びをためらいなく語ってきた」と述べて、今大会の出場者の主張は「さらに一歩を進めた飛躍」で「目を瞠（みは）る」ものがあり、自身のすべてをさらけ出し「そこから障害のある人間としての正味の生き方を探る凄まじいまでの真剣さ」が伝わり、「人間の尊厳が、どっしりと腰を据えている」と評価しています。

ここでは、紙面の都合もあり、最優秀の小林俊介さんと優秀賞の田中千晶さんの主張の要旨を掲載します。

### 「差別をしないということ」 最優秀賞　小 林　俊 介 さん

- **小林さんの主張の全文は県障害者福祉協会ホームページで読むことができます。**

小林さんの名刺には、「お笑い活動、福祉講話活動、山梨県ボッチャ協会会長兼選手･･･」といくつかの肩書が並びます。充実した生活を送りたいという強い意思を感じます。ご自身のこれまでの経験を踏まえ、差別について問いかけます。

「いまだに障害者は、多くの健常者から避けられる存在」で、「障害者に対する『偏見』が避けられ続けている原因」ではないかと冒頭で投げかけます。日本では、映画やドラマに主役として出ることはあっても、エキストラとして障害者が出ることはほとんどないことを挙げて、「リアルな世界を描いている作品のエキストラに障害者がいないのはおかしいのではないか。現実に生活している障害者を『無いもの』にしている」と訴えます。その理由を「差別や偏見があるから」とし、それをなくすためにはどうしたらよいのかを提案します。

障害の有無に関わらず、同じ場面での同じ接し方でも「感じ方は人それぞれ十人十色」であり、正しい接し方という正解はない。障害の有無に関わらず、「相手のことをどれだけ思いやり、接するか」が「差別をしないことにつながるのではないか」と語ります。

自身の、「思いやりがあり理解してくれる人たちに囲まれて育ってきた環境と差別を感じたことのない経験」を踏まえ、「相手の気持ちを考え、思いやりの心を持って接する」ことが大切であると話し、時には相手の思いを確認し、「今まで自分の考えだけで行動していた」ことを知ることで、「世界が広がるのではないか」。さらに、結びでは、「思いやるということを意識することなく、自然と思いやりの気持ちを持って接するようになるのが理想」だと訴えました。

### 「こっそりを、成し遂げろっ！」 優秀賞　田 中　千 晶 さん

田中さんは、ご病気により体が不自由となり、車いすでの生活を送っておられます。生活する上では、様々な人達とのかかわりは欠くことができません。発病以来、「すべて丸見え」となったご自身の生活からの脱出への挑戦の決意表明です。

「体が不自由になって、私の生活には秘密がない」「すべて丸見えだ」と体が不自由になってからの生活を、まず振り返ります。「有難くもあり、それなりに不自由である誰かの手を借りなければならない生活」から、日常の「こっそり」の意味と大切さを考えます。

それは「自立の上に成り立つことで、大人の楽しみ」でもある。大人の自分には資格はあるけれど、生活が「自己完結できていない」自分には「こっそりは無理」なのか。「基本的に人の手を借りることを前提に成り立っている」生活と「人知れずが原則のこっそり」との矛盾を解決する方法を模索する上で、どうかと浮かんだのが介助犬。リハビリの先生に相談し、不安を思いで乗り切り、先生と一緒に千葉の介助犬訓練施設へ。「予想以上につらい電車の長旅」であったが、施設の宿泊体験での発見は予想以上で、介助犬の働きぶりに「こっそり」の夢が大きく膨らむ。

「人が生きるとき、困難はつきもの。それでも簡単には諦めない」。それは「大きな諦めの上に立つ一人の人間としての小さなプライド」であり「障害者として生きる私の道」。「この体になって時が止まったような11年、出口のないトンネルの中にいるような先の見えない不安」の中、家族、友人、介護職員のお蔭で止まっていた時計が動き出した喜びがあふれています。「できなくなったことを数えるのではなく、できる方法を考えて」の補助犬との出会いを語り、「こっそりとしたいことを思い浮かべながら、私の心はワクワクが止まらない」と笑顔で結びました。

## 大会講評（要旨）
## 審査員代表　小 畑　文 也 氏

審査員を代表して、山梨大学教授小畑文也氏が講評を述べました。

本日この場で主張された皆さんを前にして緊張しています。このような場で堂々と主張された方々のお気持ちの強さを改めて感じるとともに、会場においでいただいた多くの皆様方に感謝申し上げます。また、大会事務局が本日まで様々に配慮し準備にあたり、本日の大会が実施できたことにも感謝します。

本日発表された皆様の状況は様々で、発表の方法もまさにユニバーサルでありました。皆さんの主張を聴かせていただいて、人に話しかけることの大切を改めて感じています。人に話しかけることで自分の存在を分かってもらうことにつながると考えています。本日堂々と主張された皆さんは、ご自分の存在をも主張されたことになるのではないかと思います。

結果として賞は分かれましたが、「成層圏の戦い」であったという印象があり、すべてが高い次元での主張であり、採点にも苦労したところです。何より素晴らしいのは皆さんが聴衆に対して主張することで自己の存在を明らかにし周囲に知らしめることにつながるのではないかということです。今日の体験を基に、これからも主張し続け、自分のことを分かってもらい、自己の存在を明らかにしていくことをさらに続けていただきたいと思います。

ポスター、標語を応募してくださった方々も同じです。それぞれの思いを様々な形で発信することが、自分の主張、存在を広く明らかにしていくことにつながります。これからもそれぞれが得意な方法で主張していきましょう。

## 「発表の方法もまさにユニバーサル」

小畑文也氏が講評で「発表の方法もまさにユニバーサル」と触れた参加者の主張の様子を紹介します。

- 努力賞受賞の小林浩太朗さんは脳性まひで全身がほとんど動かせません。お母さんが代読し、言葉として話すことはできなくても自分のことを分かって欲しい思いを発表しました。

- 特別賞受賞の秋山隆晴さんは、運転免許取得に関し、欠格条項撤廃の運動の歴史とその恩恵について、手話で発表しました。

- 特別賞受賞の穂阪義光さんは視覚に障害があり、福祉講話で対象の生徒から得た力と勇気について発表しました。

## 「障害者週間」普及・啓発キャンペーン

**障害者週間（12/3～12/9）普及・啓発街頭キャンペーン**

**早朝から先頭に立って呼びかけを行う竹内正直県障害者福祉協会理事長（正面右手）（甲府駅南口にて）**

このキャンペーンは、広く県民に障害と障害のある人に対する理解と協力を求め、すべての人がそれぞれの地域で充実した生活を送ることができる社会を実現することを目的としています。

12月4日(月)早朝の寒気の中、県障害者福祉協会竹内正直理事長の声掛けで、県内障害当事者団体、障害者福祉団体、甲府青年会議所、県老人クラブ連合会、民生・児童委員協議会、県連合婦人会、県障害福祉課等の約50名が、甲府駅南口と北口でリーフレットなどを配付しました。通勤、通学の途中の皆さん慌ただしい時間帯でしたが、配付物を手に取る方も多く、障害者週間のアピールができました。

## 「やまなし心のバリアフリー推進ポスター及び標語」

障害の有無に関わらず、すべての人が相互に人格と個性を尊重しながらともに暮らすことができる社会をテーマとして募集しました。優秀賞、佳作の作品とともに、特別賞の表彰を障害者の主張大会の表彰式と併せて行いました。

ここでは、紙面の都合から標語の優秀賞のみを紹介します。

また、全校の6割を超える生徒が標語に応募した県立甲府昭和高等学校生徒会が、今回初めて設けられた特別賞を受賞し表彰されました。

【標語優秀賞】

小中学生の部　千野結衣さん（甲府市立池田小学校）
「その笑顔　かきねをこえる　パスポート」

一般の部　遠藤節香さん（山梨県立甲府昭和高等学校）
「命の重みに差なんてないから。」

## 推進員日誌

11月末の夜、甲府市内の市営団地で火災が発生、火元となった1階に住む足の不自由な高齢男性を含む高齢者６人と小学生2人を近隣の人たちと協力して救助した県立高校３年生の男子生徒が警察から感謝状を贈られました。報道によると、この生徒の自宅は火元の部屋の真上で全焼したそうですが、けがをした人はなかったそうです。この生徒は、表彰の際に「家族や近所の皆さんと協力して救助できた。みんなでもらった感謝状です。誰も亡くならずに済んでうれしいです」と話したそうです。

この報道に接し感じるのは、この生徒を取り巻く日常の中で、お互いさまの関係ができているのではないかということです。家族、団地内で日々交わされる挨拶、会話が見えてくるように思います。近隣の家庭の家族構成や生活の様子などプライバシーというものの枠を超えた日々のつながりと理解、気配りがあるように思うのです。火災は大変なことで被災された方々にはお気の毒でしたが、高校生の活躍をとおしてうかがえることから、考えさせられることが多くあります。